

教育研究所だより



No.246 令和8年3月 日 【発行者】守山市教育研究所 所長 脇阪 久徳
守山市勝部三丁目9番1号(守山市生涯学習・教育研究センター 愛称:エルセンター 3・4階)
TEL:077-583-4217 FAX:077-583-4237
E-mail:kyoikukenkyu@city.moriyama.lg.jp
HP:http://www.city.moriyama.lg.jp/kyoikukenkyu_index.html

令和8年度 第4回 守山市初任者研修



令和8年2月3日(火)、第4回守山市初任者研修を実施しました。

午前は、立入が丘小学校 日下 智博 教諭による算数科(4年:直方体と立方体)の授業を参観し、授業研究会を行いました。「本時の目標に迫る授業実践であったか」という視点で、成果と課題、改善策をグループで話し合ったり、学校教育課 川村 中 指導主事から指導案作成と授業のポイントについて指導助言をいただいたりして、教科指導や支援のあり方の知見を深めることができました。



午後は、「先輩から学ぶ学級経営」と題して、明富中学校 安藤 葉生 教諭 と中洲小学校 津田 美佳 教諭のお二人からご講話をいただきました。



お二人の先生ともに、理論や理念に基づいた、たくさんの実践事例をしめしながら、学級づくりのポイントについて詳しく教えていただきました。初任者にとっては、日ごろの学級経営を振り返り、より良い学級づくりのヒントを数多く得ることができました。

全4回の守山市初任者研修を無事に終えることができました。講師をお引き受けいただいた皆様ありがとうございました。全4回の研修では、教員として大切にしなければならないこと、守山市独自のシステムのこと等を学ぶことができました。研修で学んだことを活かして、授業づくりや子どもたちとの関係づくりに励んでいただきたいと思います。今後の活躍を楽しみにしています。



【初任者の感想(一部抜粋)】

- ・一人ひとりが今日、何を学習すべきなのかをしっかりと把握することができており、それぞれの児童が目標に向かって取り組む姿勢が印象的であった。
- ・指導講話では、授業のノウハウだけではなく、授業づくりのために指導案をどうつくっていくか、すぐに答えを出さず待つことの重要性など、様々なことを学ぶことができた。
- ・講師お二人の話で共通していることは、「安心できる場所づくり」である。児童が安心して学級で過ごしていくためには、一人ひとりとの関りを大切にする、それぞれが輝ける場所をつくることなど、さまざま取り組みが必要だと感じた。

今年度の研究について



指導力向上に関する調査研究

★研究主題 『新たな不登校を生まない学校における視点を考える』～アセスメントの在り方を考える～

★研究の内容

学校現場における系統的なアセスメントの定着を目指し、その有効性を検証しました。具体的には、研究協力校において客観的指標に基づく「不登校リスクの可視化と共有」を行うとともに、「累積欠席日数に応じた段階的なアセスメント」を実施しました。これらの取組を通じ、不登校の未然防止・早期対応が図られることで、新たな不登校になる児童生徒が減少することを目指しました。

★研究の成果

「不登校リスクの可視化と共有」の成果として、12月末時点での「リスクが高い状況(累積欠席日数 10 日以上)」に移行した児童生徒の割合を比較したところ、研究協力校は、調査協力校に対し、4～7%低い値を示しました。また、「累積欠席日数に応じた段階的なアセスメント」では、累積欠席日数が 20 日以上(年間想定欠席日数 30 日以上)の人数を比較したところ、研究協力校では、前年度の 23 人から 10 人へと 56.5%の大幅な減少が認められました。

★課題および今後の方向性

市内の学校では月単位の欠席日数の把握に留まることが多く、年度当初からの「累積欠席日数」を指標とした不登校の未然防止・早期対応の視点が十分浸透していない現状があります。今後は、本研究の成果を広く、現場の負担を無理なく普及させるために、データに基づいた早期対応が自然と行われるような体制整備(環境づくり)が重要だと考えます。



研究において、お忙しい中、アンケート調査や聞き取り調査にご協力いただきました先生方、本当にありがとうございました。来年度も、本研究所の研究にご協力をよろしくお願いいたします。

今年度のおわりにあたりまして

2月に開催されたミラノ・コルティナオリンピック。とりわけフィギュアスケートは、「りくりゅう」ペアの活躍もあり大きな話題となりました。かつて世界の舞台上で活躍した羽生結弦選手は、試合前に「完成した演技を明確に思い描く」イメージトレーニングを大切にしていることで知られています。氷上での一瞬のジャンプやスピンは、偶然生まれるものではありません。緻密な準備と、成功のイメージの積み重ねが、あの輝きを生み出しています。

これは教育にも通じるのではないのでしょうか。今、新学習指導要領の次期改訂に向けて作業が進んでいます。教育課程部会総則・評価特別部会の、資質・能力の構造化の状況踏まえたを更なる検討の方向性(案)のなかには、『今般の構造化を通じ、「深い学び」が実現したイメージを教師が具体的に持つことができるようにすることが重要。』と記されています。私たちは、「主体的・対話的で深い学び」の実現を掲げています。しかし、その「完成した姿」を羽生選手のようにどれほど具体的に想像できていたでしょうか。子どもたちが自ら問いを立て、仲間と対話し、思考を深めていく授業の光景を、私たちは鮮明に描けていたでしょうか。

本研究所としても、次期学習指導要領を見越した先進的な研修とともに、市内各校の優れた実践を共有しながら、「主体的で対話的な学び」が実際の授業の中でどのように息づいているのかを広く共有し、そのイメージをより具体化していきたいと考えております。

これからも教育研究所では、学校現場および教職員から信頼され頼りにされる教育研究所であるよう、研修および研究を進めて参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。最後になりましたが、今年度の研究所事業推進に際して、ご指導ご協力を賜りました多くの皆様に、所員一同心より感謝を申し上げます。

今後とも、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

所員一同